

IIc がわかる 80 例 早期胃癌診断のエッセンス

中野 浩 著

病変を正確に抽出した美しい X 画像・造影画像の数々

慶大大学院准教授・放射線科／慶應義塾大学病院 予防医療センター

杉 野 吉 則

最近、消化管画像診断の総本山といえる早期胃癌研究会においても、読影するに値するような X 線画像が提示される症例は少なくなった。呈示される X 線写真で病変の部位や形状がわかるのはよいほうで、ほとんど写っていないこともある。ときには X 線検査が行われていない症例も提示され、私どもにとってはさびしい限りである。しかし、この本に載っている鮮明で美しい写真を見ていただければ、病変を的確に示現した X 線画像は内視鏡に匹敵する、いやそれ以上の情報を提供してくれることがよくわかる。

著者は、胃 X 線診断学を故熊倉賢二先生から学ばれて、40 年間にわたって研鑽を積んでこられた。私にとってはいわば兄弟子にあたり、書評を書かせていただくのはおそれ多い存在である。本書を開いた第一印象は、中野先生には失礼であるが、ほぼ全例、私が自分で検査した症例のように錯覚したことである。つまり、長年にわたって熊倉先生から学ばれた撮影法で、病変を正確に描出されており、まさに、私が撮影

しようと頭に描いている画像ばかりである。それも、細部にわたってきっちりと撮影されているので、今後は、私も精密検査の前後に必ず開けてみるために、常に手元に置いておきたい本である。序にも書かれているように、本書は読むのではなく、時間をかけてじっくりと観るべきである。無駄な説明はなく、「本物」の X 線画像が肉眼標本や病理組織の所見を忠実に表していることを実感し、学んでほしい。

画像はほとんどが二重造影像であるが、二重造影法の基本は、まず、適度の伸展度で造影剤を粘膜面によく付着させること、次に病変を正面像として捉えることである。その際、できるだけ病変を水平位でかつフィルム（あるいは検出器）と並行にする。さらに、病変が陥凹であれば、そこに造影剤を溜めて、その輪郭や深さを表す。また隆起や粘膜襞については造影剤を周囲に溜めて輪郭などを表すことによって、病変を表現する。すなわち、熊倉先生のいう二重造影-II である。本書では、IIc 56 症例、スキルス 14 症例、

MALT リンパ腫など 10 症例、さらに参考症例約 20 例のほぼすべてについて、陥凹部に造影剤がきっちりと溜められているので、IIc の形状や輪郭における不整さとはどのようなものであるかよく理解できる。また、隆起については周囲に造影剤を溜めることにより輪郭の性状、頂部の粘膜の様相がよく表現されている。さらに、IIc の周囲の粘膜襞やスキルスの粘膜襞については、襞間に造影剤を溜めることや伸展性を変えることより、どのような所見を異常とするのかを、本書をじっくりと読むことで、しっかりと学んでほしい。

最初にも述べたが、本物の IIc の X 線画像とはどのようなものであるかがよくわかるので、消化管 X 線診断に携わる方や、これから志している方はもちろんのこと、胃の検査は内視鏡で十分と考えている方にもぜひ、お薦めしたい。

●B5 頁 212 2008 年 定価 8,400 円
(本体 8,000 円 + 税 5%)

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)